

生ける水

聖霊による刷新のために

「日本のデューケイン・ウィークエンド」教会に新しい風を
ユースのための信仰生活刷新セミナー開かれる・報告と証し

ユースコーディネーター ヤコブ 神保 恵

去る10月8日から10日にかけての三日間、東京の男子跣足カルメル修道会の黙想の家で、CHARRISユース初となる「聖霊による日本の若者のための信仰生活刷新セミナー」が行われました。私はこのセミナーで、聖霊は今、生きてこの場におられる事、また賜物は一人ひとりに（全体の利益のため、教会を造り上げるために）神様から与えられているということをまさに実感いたしました。

セミナー期間中に、秋元さんとの会話の中で「私には賜物が無いから」と言うのと「それは違うよ。『私には賜物が無い』と言うのは、聖霊に対して失礼だよ！」と秋元さんは答えられました。その時、私はハッとさせられました。というのも、私はこのセミナー中は事務作業に専念しようと考えていて、自分の賜物についての発想すらなかったことが、聖霊によって照らされたからです。まさしくその時、目が開かれました。

そして皆で聖霊の満たしを求めて一人ひとりのために祈っていた時には、私はまるで自分自身ではないと感じていました。普

段は賛美の曲で歌う時に声が小さいと言われてしまう私ですが、その時には心が開かれていて、腹の底から声量が自然に湧き上がり、歌と異言で神様を心から賛美しました。ユースの仲間からも、「恵の歌う声を初めて聴いた。まるで声が楽器のように響いていた。」と言われました。また、心にはビジョンやメッセージが湧き上がりました。そして参加者は与えられた賜物を使って奉仕し、私たちの思いをはるかに超える癒しと聖霊の満たし、回心の恵みがありました。まさに天が開き、天国と地上が繋がった時でした。小さい群れですが、神様が一人ひとりを愛され、ここに呼ばれたのだと感じました。

セミナーが始まる前に、「このセミナーは日本にとつてのデューケイン・ウィークエンドになるでしょう」と預言されていましたが、その通りになったと、私は思います。創造主なる聖霊は賛美されますように！ 私たち一人ひとりの人生に介入し、癒し満たして下さった慈しみの主に感謝！ 賛美！ 主に栄光！

☆ 目 次 ☆

ユースのための信仰生活セミナー開かれる／ 報告と証し（神保恵ほか）	1
永年来の奉仕者・川瀬隆枝さん、主の みもとへ／追悼の辞（畠基幸神父）	4
挑戦的な時代にカトリック信者として 生きるということ（ラルフ・マーチン）	6
異言の賜物と私たちの「信仰生活」 （シスター・ナンシー・ケラー）	9
新しい門出に向けて （小熊晴代）	12

発行
聖霊による刷新
全国委員会

編集委員

中村友太郎
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021
東京都品川区上大崎2丁目
10-34-2-312
聖霊による刷新全国委員会
Email: ikerumizulivingwater@gmail.com
郵便振替 00190-1-18878
口座名 聖霊による刷新全国委員会

(東京都からの参加者・女性)

私も十年ぶりの満たしに大変深い体験をさせて頂きました。ありがとうございます。私も「ただいま」と叫んでしまいました。

(国永薫さん)

わたしも、初めて満たしを受けた、あの頃の喜びの中にいた、燃えていた感覚を取り戻した感じです。わたしも日々の忙しさの中で、神さまから遠ざかっていました・・・。

預言のおかげで告解することもでき、そのおかげで、ご聖体でお祈りしていただいたときにイエス様の御顔を仰ぐことができました。感謝しかありません。これからも一緒に、喜びながら、歌いながら、踊りながら、神さまを賛美していききたいです!!

(佐々木直さん)

音楽関係のサポーターとして参加しましたが、ユースの皆様が聖霊に強められ、それぞれの賜物を豊かに發揮、折り合い、



仕え合うのを見て感動させられました。将来の雛形となる黙想会だったと思います。参加して「主の霊がおられるところには自由がある」(二コリント3・17)という御言葉が思い浮かびました。

講話の内容は深く、讚美、ユースの証しも充実していました。ユースの集いもコロナ禍で制限を受けてきましたが、この集いでは思う存分、讚美礼拝しました。満たしでは強く聖霊が働かれ、各種の傷にも触れてくださ

いました。ユースの皆様のみならず、年長のヘルパー陣にとっても回復の時となる黙想会でした。

ユースの集いは国際色豊かで、これはとても良いことだと思えます。今後、全国や各国のユースが今回のように聖霊の中でますます交流されるのを願っております。

(ニコル・ハールツェンバルグさん)

この黙想会は信じられないほどのものでした。初めからとても強く、ご自分の愛を受けるように、また私たちの愛を求めておられるイエスの渴きを感じました。礼拝は私たちが聖霊の火のような愛のうちにもたらし、私たちは一つになって礼拝し、天上界とも一致していました。お互いのために共に祈ったときに、私は、以前に感じたことになかった主における一致を感じました。これこそ、他の信者の方々にも体験し、また他の方々と分かち合ってほしいことです。

この週末に神様が私たちと共になさったことは、ほんの始まりに過ぎません!

まさに、聖書の次のことばのとおりです。「人が、これまで見聞きしたことも、想像したこともないほどの素晴らしいことを、神は、ご自分を愛する人々のために用意してくださった。」(イザヤ64・4、65・17) 私たちには、この素晴らしいことが何かわかっています。神様がご自分の聖霊を通して知らせてくださったからです。神の霊は、神の最も奥深いお考えを探り出して、それを教えてくださるのです。(コリントの信徒への手紙一、2・9-10)

(簡崎恩さん)

「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを神はご自分を愛する者たちに準備された。」(コリントの教会への手紙一、2・9) 今回の黙想会を思い返すと、この言葉が真っ先に出てきます。自分にとってはまさにそのまま

です。

黙想会を準備している時、自分の無力さを感じて、不安しかありませんでした。どうすればよい黙想会ができるのか。参加者に何が与えられるのかなどなど、いっぱい考えてしまつて、安全な方法なら昔の母国であげた黙想会の経験をコピーしようと思いましたが、もちろんそれは通用しませんでした。不安を抱いて、二泊三日すら無用に思われましたが、神様が私たち一人ひとりに準備してくれた恵みが、どんどん、どんどん見えてきて、結局、全部事前の準備段階では思ったこともないものばかりになりました。

とくに皆さんにシェアしたいことは二つあります。

その一つは、へこころから神様に告解ができたことです。赦しの秘跡は、カトリック信者としての私は毎年毎年受けていて、決して欠けたりすることはないので、心の中だけでは、神父様には言っていないある罪があることをよく知っています。

それは十数年にも渡つてずっと、自分で苦しんでいながら、口にするこすらできない弱さでした。毎回秘跡を受ける時、いつも遠回しに、とても小さな声で聞こえるように聞こえないように告解していました。もちろんこれでも赦しの秘跡は成立し、赦してもらえと思いますが、心の中ではこのような自分が赦せなかつたのです。

今回の黙想会中、赦しの秘跡の時間になる前に、皆がお聖堂の前で喋っていた時に、神父さんが来て、一緒に色々な話をされました。その一つは昔、とても口では言えない罪があつたのに、ある黙想会で秘跡を受けに行く時に、結果的にズバツと告解できたという体験談でした。これを耳にして、自分は孤独ではなかつた、神父さんでも告解中に言い辛いことがあるんだと知り、胸の奥から勇気がわき出し、ずっと抱えていた重荷もようやく神様に捧げられました。二つ目にシェアしたかったのは、自分には無いと思つていた

ビジョンの恵みを、実際にいただいていることが体感できるほどに、はつきりと判つたことです。

聖霊刷新のグループに入つて、色々な奉仕をしてきましたが、一緒に祈る時、見たもの、頭に浮かんだものは神様から伝えられたメッセージかどうか区別できずにいました。そして他の人が自分の思つたものを言い出した時、初めてそれが神様からのものだとか確かめられて、自分の信仰はちっぽけなものだとも思っています。そして信じてることのできない自分もがっかりしていました。それが今回の黙想会では、ビジョンと言葉をいただいた時、今までにない形で、自分では思いもよらないほどわかり易く、これを言い出すのに、もう途惑うことはいらないほどでした。

こんなちっぽけな信仰を抱いている私にも、こんなに優しく、装備してくださり、用いられる

ことが嬉しかったのです。この黙想会では、思いもよらない、このように大きな恵みをいただいで、そして他の方々にもいっぱいのプレゼントがあつて、このような状況が本当にずっと続けられたらいいなあと思ひました。感謝の気持ちがいっぱいで、喜びが胸いっぱいです。神さまほんとうに有難う！

(菊地彩衣さん)

10月8・9の二日間、神保恵くんが声を掛けてくれていたので、ユースの黙想会に参加してみようと思ひました。参加にあつて、一つの思いがありました。それは、二十歳の頃に神様に出会つたあの時を思い出したいということ。私は、この黙想会に参加する間は自分に素直で、自分の心を誤魔化さないでいようと思ひました。二日間だけの参加ということで満たしを受けられないスケジュールだったので、調整して下さり、告解をして満たしを受けることができたのです！

私はコットンネ修道会から戻ってからも、黙想会に参加したり、按手をしてもらえる機会がありました。私はその時には何も感じられませんでした。

満たしの祈りをしてもらっている時、胸の辺りが熱くなるのを感じました。何かがこみ上げてくるような……。ユースの仲間の簡さんの「泣きたかったら、泣いていいんです。」という一言に、私は泣かない、私は泣けない、と思っていました。何故か涙が溢れてきて止まりませんでした。どこから聞こえたのか、誰が言ってくれたのかも分かりませんが、「さっえー」と呼ぶ声はつきりと聞こえました。

私の心の中にあつた周りの人からの見えない言葉に対する恐れや不安、迷い、葛藤が黒い膜のように私を覆っていたのですが、全部取り払われたように心と体が軽くなりました。訳も分からず泣いたのは二十歳の時以来、二度目でした。

私は修道会を出た自分を恥じていました。そして、そんな私を神様は見捨てたんだと思っていました。修道者でなくなった私を嫌っていると思っていました。多くの人の期待を裏切つて、修道会に戻るということすら応えられないと後ろ向きになって、神様を見るのをやめました。考えることをやめました。でも、この時はつきりと分かりました。

神様はずっと待っていて下さったのだということ。私が何者であっても神様の方を向くまで、戻るまでずっと。

ユースの黙想会が終わって、コットンネ修道会のブラザー・シンにすぐにメールを送りたくなりました。黙想会の出来事を話しました。私はブラザー・シンを父のように慕っていました。でも修道会を出たことで、メールのやり取りではいつもブラザーのほうから「ごめんね」と書いてありました。それがとてもとても辛く苦しかったのですが、その日のメールには「彩衣が戻ってきた！神に感謝！」と喜んでくれたのです。私が神様の元に戻ったと喜んでくれました。

満たしの日からずっと私の心の中の「神は偉大」(How Great is Our God) という賛美が止まりません。今まで悪態ばかりついて仕事をしていたのですが、いけない！と思うようになり、怒りの心が出て来た時には、深呼吸して祈るようになりました。今まで私の目を覆っていたものが取り払われて、とつても自由になりました。朝起きて神様に感謝して、寝る前に神様に感謝する。世界が眩しいくらい輝いてみえる毎日を過ごしていきます。私は神様に助けられています。私に神様が望まれる道を祈りながら探していきたいと思えます。神様ありがとうございます！！

誰よりも愛しています！！

わが国の「刷新」の初期からの奉仕者

マグダラのマリア 川瀬隆枝さん 主のみもとへ

御受難会司祭 畠 基幸神父

二〇二二年十二月九日に84歳で急逝された川瀬さんのために、十二月十二日に宝塚の御受難会女子修道院で葬儀ミサが行われました。司式された畠基幸神父様は、前日の「待降節第三主日・喜びの主日」の朗読箇所にもとづく説教をなさいましたが、そのま





2017年ローマで、中央が川瀬さん

私たちは突然の訃報に接し、驚き悲しんでおります。こんなにも早く別れが来るとは想像することすらできませんでした。ご遺族、親族の皆様 お悔やみ申し上げます。また、教会での兄弟姉妹、そして長らく聖霊による刷新の運動にあつて、ともに賛美と感謝の祈りをささげてきた全国奉仕者の皆様、そして祈り会の仲間の皆様、川瀬隆枝様の帰天に際し葬送の儀を執り行いながら、故人の信仰の歩みとその原動力となった主イエスの愛、聖霊の交わりによる一致を思い起こしましょう。

三年前、ご主人の川瀬章さまが洗礼を受けられ、そのために長年祈ってこられた川瀬さまは

大変喜ばれました。「教会に何を求めますか」「信仰を求めます」「信仰によって何が与えられますか」「永遠のいのちが与えられます」。川瀬様は、長年連れ添ったご主人様が洗礼を受けることに同意されて、永遠のいのちに入る約束が洗礼によって授けられたことを自分のことのようにとても喜ばれました。

川瀬様ご自身は、長男の嫁として洗礼を受けることが許されず、川瀬家の嫁として姑に長年忍耐を重ねて仕え、姑様から従順な姿が認められてようやく自由にしていよとのことばに、飛び跳ねるほどの喜びをもって北須磨教会でペンケレシ神父から洗礼受けられた思いを述べておられます。その時から聖霊の炎のよいうな愛が燃えたつたのです。息子様が髄膜炎になったときには、自分のいのちを差し出すほどの願い（三日間徹夜のロザリオの祈り）をささげて、祈りが聞きとげられたとき、神様にご自分を奉獻することを誓われました。自分の受けた恵みを分かち与え

ること。友のためにいのちを与えること、これ以上の大きな愛はないというイエスの言葉を信じて、祈りだけでなく、困った人や苦しむ人の友となつて、夜遅くまで悩む婦人たちの愚痴をたくさん聞いて慰めを与え、困った人に必要な支援をして、日々執り成しの祈りをささげてこられました。

私が川瀬様に会つたのは、二十年ほど前のことです。二〇〇一年頃の関西大会で関西の奉仕者の中にいて、歌って賛美して踊って朗らかな様子を遠くからみました。売布の宝塚黙想の家で毎月一回関西委員会の集いを行い、指導者のクレメント神父やウィックス神父が指導者でしたが、二〇〇六年頃から私がその役目を受け継ぎ、関西大会でブラジルからエドワード神父を招きました。一年に一度大会を開くだけでは、聖霊による刷新は教会の中に広がらないとの指摘に、発奮して聖霊セミナーを開いたり、聖霊降臨の黙想会や

司祭黙想会など主催したり、また年三回の百日共同祈願を行つたりで川瀬さんとわたしは二人三脚で関西を中心にして聖霊による刷新の普及に務めました。秋田や仙台、北海道、九州あるいは、マレーシアやインドネシア、そしてアフリカやローマへも聖霊の大会のあるところ一緒にでかけたのです。世界リーダーズ会議がベトレヘムの飼い葉桶ホテルで開かれたときも川瀬さんと一緒でした。日本にもお呼びしたことのある聖霊刷新の会長ホワイトヘッド氏と再会したとき、日本からの代表のために祝福の祈りをお願いしました。彼が川瀬さんの上祈ったとき、愛が満ち溢れていると喜び驚かれました。川瀬さんは、永遠のいのちの恵み、神の愛が満ち溢れる愛の奉仕の賜物（カリスマ）の人だったのです。

川瀬さんにとって、東京で最盛期の頃に、関西にも祈り会を始めるため東京から伊藤芳雄さんの指導を受けたこと、阪神淡

路大地震の被災のときには、自宅を開放してマリスト会のブラザー・オウガスチンと祈りの奉仕を継続し、被災した人々の霊的な心の支えになったこと等の思い出をよく話されました。小林司教様やペンケレシ神父様があまりにも熱心な活動の故に異端児のように追い出されたとき

にも、愛のある温かなサポートを続けられたこともまた大きな働きでした。教会を批判することなく、心からの愛を持って忍耐の日々を送り、晩年、この聖霊刷新の活動が細っていくなかで、善いものなのだ信じて主が来られる、その時が来るのを期待し、日々の十字架を担い、御受難の中に聖霊の力が溢れてくることを信じておられたので

挑戦的な時代にカトリック信者として生きるといふこと

教会内部の分裂は、私たちが今日直面しているもう一つの課題です。ラルフ・マーティン

『カリスインディア』誌・二〇二二年九月号から

私たちは挑戦的な時代に生きています。様々な挑戦のいくつかに小さな光を投げかけて確執と混乱、分裂のさ中であって、

す。院長様が葬儀を受け入れてくださったのも、御受難会の友の会会員にもなり、シスター方と日頃から親交を重ねてこられたからですし、また、院長様は、百日共同祈願のとりなしの祈りも全面的に支援してくださったのです。

今、教会は降誕祭を迎える典礼の季節です。先週から今週にかけては、そのメシアに先立つて送られた洗礼者ヨハネの言葉と行いを思い起こしています。そしてここ数日間のミサの基本的な典礼の色調は、喜びです。「主にあつていつも喜び、重ねて言う、喜び。主は近づいておられる（ガラテヤ4:4-5）」。洗礼者ヨハネに告げるイエ

どのようにしたら心を平和に、また頭を明晰に保つことができ、そのかに焦点を当ててみたいと思います。

スのことばは、メシア（救い主）のしるしとして次のように言われました。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」

クリスマスは、いのちの主キリスト、救い主イエスが世に來られた喜びに満ちています。川瀬さんはマグダラのマリアを洗礼名に選ばれました。おそらく、罪深い女が、復活したイエスの最初のあかし人になった福音のことばに感銘を受けたからでした。そして聖霊刷新の関わりの中で、たくさんの人々が癒やされるのを見てきたのです。マ

第一に、私たちが直面している途方もない挑戦の一つは、私たちの文化において起こっていることです。物事がどれだけ速

グダラのマリアの「わたしは主を見ました」、あの復活の主に出会った、その喜びのメッセージは、聖霊による刷新の労苦において川瀬さんの体験と重なりあつて響きました。

今、川瀬さんは聖霊の愛の炎で清められ、主イエスの御顔をありのままに見て、永遠のいのちの喜びに満たされ安らかな眠りに就かれました。天上での賛美と感謝の歌声をいつかわたしたちも共にすることでしょう。ここに集う私たちは賛美と感謝の祈りをもって、最後の晩餐の宴に与り、御父の愛に委ねて、故人のために祈りましょう。感謝のうちに。

やかに劣化し、刻一刻と狂気に近づいているかについては、信じがたいほどです。私たちの文化における権力と影響力を行使するためのあらゆる達成手段が、キリストと教会に敵対する人々の手中にあります。彼らは現にキリスト者をまったく好まず、

事実、私たちがイエス・キリストを告白するのであれば、当然言わざるを得ないことを語って欲しくないのです。

米国の司教協議会会長であり、ロサンゼルス大司教であるゴメス大司教は次のように述べておられます。

「様々な企業、政府（統治機構）、大学、マスメディア、文化的・職業的な支配者集団において重責を担うこのようなグループは、いわゆるグローバルな文明を設立することを望んでいます。そして実際に、彼らが見るところでは、宗教、特にキリスト教は彼らが築こうとしている社会の邪魔になっっているに過ぎないのです」。

人類の大部分は、この根源的な誘惑に幻惑されつつあるので、この誘惑こそは、神への従順から解き放たれ、自分自身を思い通りの存在へと仕立て上げることができると私たちに思い込ませようと、悪魔が楽園で提示したものにほかなりません。多くの苦難が生起しようとして

おり、既にこのことのゆえに生じつつあります。特に性的不道徳の領域で苦難が起こっており、それは世俗社会から現代、キリスト者に突き付けられている槍の矛先（銃口）なのです。

教会内部の分裂は私たちが今日直面しているもう一つの課題です。世界がまさに教会から明解な言葉を、つまり人類にとつて唯一の希望であるイエス・キリストに対する悔い改めと信仰に關する明快なメッセージを聴く必要のあるときに、むしろ私たちには分裂や背教・棄教、あからさまな反逆が存在しています。水面下にあつて、多くの人々が長年にわたり、様々な領域で教会とその教えを変質させようとしてきました。それでも私は、ほかでもなく高位聖職者たちや枢機卿たちが公然と「カトリック教会が人間の性倫理について教えていることは真理だと思えない」と発言するのを目の当たりにするとは全く想定していませんでした。

ドイツの司教協議会会長であ

るベツィング司教とのインタビューは、最悪のつまりずきかもしれません。ドイツの雑誌「ブレンテ」（訳注：週刊の大衆誌）のインタビュー記事の中で同司教は「性的不道徳に關する教会の教えをそのまま生きている者など一人もいません。どう考えても、それは変更しなければならぬのです」と述べました。

これは救いたいほどの詭弁です。何百万、何千万もの人々が貞節な生活を送っており、性愛という重要な領域においてイエスに従っています。これはひどい虚言であり、誘惑と戦っている人々が弱体化していくことを私は懸念しています。

このような状況にあつて私たちはどうすれば良いのでしょうか。この挑戦的な時代にあつてカトリック信者としてどのような生きべきなのでしょうか。

私たちが理解する必要のある第一のことは、神の摂理の御手のもとにおこらないことは、この世にあつても、教会にあつても何一つ起こらないということ

です。これこそ、まさに重要な真理です。

これらの明々白々とした悪しき事柄、反逆をなぜ神はお許しになるのでしょうか。忍耐強い神だからです。そして私の考えでは、彼らにお与えになった多くの積極的な祝福を受けたあとで人々がみもとに戻らなかった時に、神はときどき手綱を締め直し始められるのです。主は人々を正気に戻そうとするために、進行中のあらゆることを用いられます。私たちは皆、何らかの真摯（しんし）な個人的決心を下さなければなりません。

私たちは誰を信じているのでしょうか。誰に従おうとしているのでしょうか。

私たちのすべての者が、マタイ福音書16章15節に見出される「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という問いに、新しい仕方で答える必要があるのです。

あなたがたはイエスを何者だと言うのか。

もしもイエスが主であるなら、

彼に対する唯一の賢明な応答は全面的な明け渡しです。多くの人々が地位の高い有力者、影響力のある思想家や賢人たちの一群にイエスを添え物のようにつけ加えてきました。それではないのです。イエスは主なのです。私たちは彼の前でひれ伏して「主よ、お話ください。しもべは聞いております」（サムエル記上3・10）と言わなければなりません。

私たちはさらにカトリック教会の本来の使命を再び確言しなければなりません。

社会正義のために働き続ける必要にも同意する一方で、ゴメス大司教は、ある人々はキリスト教を社会正義の宗教にしようとしていますが、社会正義は教会の根本的使命である魂の救済とはほとんど関わりがない、と述べました。大司教はこの助言を、私たちが自らの心を平穩に、また自らの頭を明晰に保つのに助けとなるようにと提示されたのです。

「私たちはイエス・キリスト

を創造的に、愛と確信をもって恐れることなく宣言する必要があります。私たちは社会正義や政治的独自性を標榜するこの新しい諸宗教によって脅迫されるべきではありません。福音はどこまでも、世界がこれまで目撃してきた社会的変化に対する力強い原動力なのです」。

平和な心と明晰な頭を保持するために必要な第三のものは、聖書の真実性と信頼性に対する自らの確信を回復することです。

ドイツで起こっていることの原因の一つは、聖書をズタズタに切り裂いてきた、長きにわたる悪しき時代の懐疑的かつ冷笑的な聖書学研究なのです。今日の教会の多くの人々は聖書を信じていないと思います。彼らは自分たちが聖書を超えていると考えています。私たちが特にはっきりとさせる必要のある二つの領域は「結婚」と「性」の問題です。というのはいくつか、いろいろな形で争われている現場だからです。

これらの点を明らかにするの

に、航空宇宙工学の知識も必要なければ、四百ページもの分厚い書物を読破する必要もありません。神は私をいのちへと開かれた聖なる結婚において男と女を一つにする目的のために、人類を男と女に創造されました。聖なる婚姻の外にあるいかなる性の営みも、主にとって忌まわしく、人々にとって有害です。ある人々は「ひどい！それはヘイトスピーチだ」と言います。いいえ、これは愛のスピーチ（言説）なのです。偽りの生き方をしても幸せだし、滅びることはないといつわることには愛ではありません。破滅への道を突き進む人々を祝福することは愛ではありません。

最後に私たちは迫害を覚悟する必要があると私は思います。

どのように迫害を覚悟するのでしようか。あなたは、主のかわりににおいて成長します。あなたはみことばの知識において成長します。そして霊的な武器をもって反キリストと対決する

のです。「エフェソの信徒への手紙」6章・12-13節においてパウロはこう書いています。

「わたしたちの戦いは、血肉を相手にすることではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武器を身につけなさい。」

私は何としてもイエスを信じるつもりです。彼は主なのです。彼は私の救い主です。私を御父の家に連れ戻しに來られました。御摂理のもとに起こらないものは何も起こりません。彼は今の時代から偉大にして力強い善を引き出すご計画を持っておられます。ご計画が成就するまでの間、汚されることもあるかも知れませんが、わたしは終わりで持ちこたえることでしょう。私は御父の家に帰りたいのですから。

異言の賜物は私たちの「信仰生活」のための賜物でしょうか？

シスター・ナンシー・ケラー

「ペンテコスト・トウデイ」二〇二二年・第二号掲載の記事から

「この異言の賜物のある方を

ご存じですか？」スーネンス枢機卿が私たちにこう質問なさなつたときに、わたしはジム・フエリー神父とシスター・マージョリー・ウォルシュと共に座っていました。わたしは米国ニュージャージー州のコンベント・ステーションにある祈りの家の賛美の集いで聖霊生活セミナー初日の講話を担当したことがあったので、ジム神父が手招きして私に答えるように合図を送ってきました。私は即座に、異言の賜物についての個人的な証しと体験を語り始めましたが、話を終えて初めて、聖霊がなさっていたことを畏敬の念を抱きつつ思い知ったのです。

私にとって「聖霊による洗礼」の最初の実りは、イエスを自分の「主」として身をもって知るといふ新しい個人的な体験と、

祈りの家で行われているように

主を賛美したいという強いあこがれでした。「聖霊の満ちし」を受けするために祈ってもらったときには、異言の賜物をまだ体験していませんでした。私は誰からも耳をそばだてられることのない修道院内の空き部屋に上がっていったものでした。しばらくはこれで満足していました。が、やがて自分のうちに、自分が体験している恵みに対する愛と感謝を表現したいという願いが自分自身のことを超えるほどに高まっていき、異言による賛美や霊歌の賜物を発揮するようになりました。最初は自分自身に耳を傾け、「これは本当に異言の賜物なのか、自分でそれを捏造しているのではないか」と問い続けていましたが、少しずつ注意を自分から引き離して聖霊が私の知性と心を神のもとへと引き上げてくださるがまま

にお委ねするようになりました。

私たちは実際に聖霊の賜物を、とりわけ異言の賜物を必要としているのか？

人々はしばしばこのような問いを投げかけてきます。私はその疑問に対して賜物の、ここでは特に異言の賜物の価値についてお教えすることによって答えるのが好きです。「聖霊による洗礼」について私が最初に読んだのは、ステイブ・クラーク氏が作成した短いパンフレットでしたが、その中で彼は「聖霊による洗礼」を、神が聖霊について約束されているすべてのことを私たちが体験するように聖霊を解き放つこととして定義づけています。まず「解き放つ」という単語は、洗礼と堅信において聖霊を受け取っていることを理解する一助となりましたが、個人的な聖霊降臨への待望の欠

落が私の中に息づく恵みを制約してしまいました。ひとたび新しい期待に触れると、聖霊の様々な約束のすべてに渴きを覚えることになりました。そこで聖書の聖句索引（コンコルダンス）を手にとって、それに該当する聖書箇所を首っ引きで調べることになったのです。

聖霊の約束にまつわる聖書箇所すべてが、次の3つのカテゴリーに分類されて行くのを知るのは愉快なことでした。すなわち（1）聖性、または個人的な刷新の約束。「あなたはわたしを知るようになる」（エレミヤ31・34）、（2）共通の刷新のための一致への約束。「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（エゼキエル37・23）、（3）宣教、または宣教奉仕の刷新。「あなたがたは地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒言行録1・8）。

私は聖霊の様々な賜物にはこれらと同じ目的があることを理解することになりました。それ

です。「完璧なハーモニーで歌われているのですから、これは聖霊のみ業に相違ありません。聖霊にしかできないことです」。

カリスマ的な賜物は、ミニストリーのためにある。

異言の賜物はまた、何のために祈れば良いかわからない時の奉仕の賜物でもありません。数年前に私の姉が単純なヘルニア手術の後に呼吸不全に陥ったときに、呼吸装置につながれました。彼女は出産時に六人の子供を亡くし、また二人の十代の養子を事故で失った未亡人でした。昏睡状態だったので、彼女が亡き夫や子供たちの所へ行きたいのか、それとも私たちのもとに戻って来たいのかわかりませんでした。私にできるのは彼女の心の中にあることは聖霊がご存じだ、と信じて異言で祈ることだけでした。キャシーが亡くなった時、聖書を開くとイザヤ60章4節の一節が目飛び込んできました。そこには「赤子たちが乳母の腕に抱えられ、息子た

ちも遠くからやって来る」と書かれていました。それで聖霊は彼女の心の望みをご存知でそれを成就されたのだと私は確信したのです。

聖霊のカリスマ的な賜物における成熟

次のような言葉を耳にすることは稀なことではありません。「私たちははやこれらの賜物を、ことに異言の賜物を必要としません。それはカリスマ刷新の始まりの時期のためのものだったのであり、今では私たちは観想の段階に移行しています」。しかし、私は聖霊の賜物は減少することなく、実際には成熟するにつれて一層強くなると思っています。異言の賜物は、主が私たちの心に向かつてなお一層深い形で語りかけることがおできになるように、私たちが静めるために用いる観想の賜物となるのです。私たちが観想へと導くために異質な他の宗教から用語を借用する必要があるとは思えません。異言で祈る賜物によつ

て、私たちは観想生活において成熟するのですから、同じ効果があるのです。

ただ、賜物を体験し行使する仕方には変化があります。聖霊に満たされることの結果の一つは新しく、主とのかわりを感じることで、しばしば人は聖霊の出来事に対して尊大で熱狂的な思いを感じたりします。

しかし、最初の熱狂が去り、好ましい感情が色あせて、初めに主が私たちの注意を惹くのに用いられた現われが消えると、人々はしばしば落胆します。そこで彼らは、私たちのカリスマ的な霊的成熟も、かつての霊性の先達たちが各時代を通じて語り伝えてきたのと同じ「火による試練」をくぐり抜ける必要を認めることに失敗するのです。

私たちが成熟するにつれて、カリスマ的な賜物のひとつひとつの行使は信仰の行為となり、ある意味で「水の上を歩く」ことになるのです。神はそれを様々な賜物を駆使した奉仕に対する必要に応じて、意志の行為と

してくださるのです。聖霊の賜物は私たちがあつさりと手放すように、悪魔に唆されがちな奉仕です。耐え抜く必要性こそが、基本的な課題であり、好ましく感じられないときにさえも、異言の賜物の喜びが続くことを確信して、異言の賜物をもって神を賛美することを選び取らなければなりません。

*シスター・ナンシー・ケラーはニューヨークの愛徳姉妹会の一員で、一九七〇年以来、カトリックのカリスマ刷新にかかわってきた。「聖エリザベス・シートン祈りの家」の創設メンバーの一人であり、ニューヨーク大司教区の奉仕チームコーディネーター、また十年間にわたり米国の全国奉仕委員会のメンバーでもあった。ICCRS評議会にも参与し、在ローマICCRS事務局長も務めた。さらにエキュメニカル・カリスマ委員会の議長も歴任してきた。

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたにありますように。」

神の御心によって全国コムニオ奉仕会コーディネーターとされた小熊晴代から、全国至るところで、カトリック聖霊による刷新という恵みの潮流の中で神に愛され、聖なる者として召され、AD二〇二三年を歩み始めたすべての人たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたにありますように。

現在の立場上、本誌の冒頭ページに登場することが多いのですが、今号では最終ページからご挨拶申し上げます。遊び心も手伝って、使徒パウロが諸教会や親しい個人宛てに送ったとされる手紙を真似てみました。聖書の御言葉に養われて45年、初めて「ローマの信徒への手紙」から「フィレモンへの手紙」まで、13通の冒頭の挨拶の部分を拾い読みしてみても、新たな発見がありました。私が見出しとし

て選んだ御言葉は、一語一句違わず8通の手紙で使われており、他の5通もほぼ同じです。独り子を与えるほど世を愛された父なる神と主イエス・キリストの恵みと平和を聖霊によって深く知っていたパウロだからこそ、この宝を各地の兄弟姉妹に分け与えようとしたのではと感じています。慣れ親しんでいる御言葉も、一年前に本誌で私がお伝えしたように、私たちが新しい革袋を準備して開いておけば、新しいぶどう酒として注がれ、味わい深い喜びの源となります。もう一つの新しい革袋、昨年十一月の待降節第一主日から始まった新しいミサ式次第にはもう慣れましたか。今回の式文は二〇〇二年に発行されたラテン語規範版第3版やそれに伴う英語版にほぼ忠実で、私が訳文編集を担当する月刊誌、『毎日の黙想』（聖母の騎士社刊）でも訳

注で違いを説明する必要がなくなつたので喜んでいるのですが、ミサ中は新しい式次第から目が離せません。ポーツとしていると、つい「また司祭とともに」と答えてしまいます。司祭や助祭という役職ではなく目の前にいる「あなた」に「私」が応答していることを改めて意識する機会となっています。

シノドスの旅も二年目に入り、二月にはアジアの大陸別シノドスがタイのバンコックで開催され、十月にはローマで総会の第一会期が始まります。合わせるように、カリス（CHARIS、カトリック聖霊による刷新国際奉仕会）も十月の第一回総会に向けて準備が進んでおり、それに先立って三月にはマレーシアのコタキナバルでアジア・オセアニア大陸の各国コーディネーターによる会議が開催されます。コロナ禍が始まってから出会いは、よく口ずさむ歌の一つに、WAY MAKERがあります。イエスは御父に至る唯一の道であり、道を作る方。この道を聖

霊に導かれて共に歩んで行きましょう。

WAY MAKER

〔道を作る方〕

▽あなたはここにおられ／私たちの間で動いておられる／私はあなたを崇めます／あなたはここににおられ／この場で働いておられる／私はあなたを崇めます
▽あなたは道を作る方／奇跡を起こす方／約束を守る方／闇の光／私の神／それがあなた
▽あなたはここにおられ／どんな人の心にも触れられる／私はあなたを崇める／あなたはここににおられ／どんな人の心も癒される／私はあなたを崇める
▽あなたはここにおられ／私たちの人生を変えておられる／あなたはここににおられ／どんな人の心も修復される
▽たとえ私には見えなくても／あなたは働いておられる／たとえ私には感じられなくても／あなたは働いておられる／あなたは働くことを決してやめない

（小熊晴代私訳）